人生の弁証法

―古い友人たちへのメッセージ―

■人生の秋においての嘆息

「会社が倒産し、敗軍の将となってしまった」「長らくやってきた事業部門が廃止され、業績が無になった」「仕事に没頭してきたが、終ってみると自分には何も残っていない」「俺の人生は何だったのか」……。

昨今、こうした友人たちの嘆きの声がきこえてくる。志が高く、精励の人ほど、不遇の念がつのりストレスが昂じる。老後は、経歴に誇りをもち、経済的にも精神的にも貯えをもって満足に過ごせるはずであった。過去・現在・未来は、それぞれ原因、結果として継続し、境遇は安定上昇していく予定であった。ところが実際には、過去は瓦解して現在に寄与しなかったし、将来も決して展望は明るくない。むしろこれからさきは、現在の暮しのさらなるきり詰めを余儀なくされそうである。自己をとりまく生活と社会は、向上発展したのではなく、ただ変貌したにすぎなかったのではないか。自分は運に恵まれなかった。明暗が分かれてしまったのだ……。

もしこのように否定的にだけ観念しているとするならば、それは真実に根ざした平静な明察といえるだろうか。いや違うだろう。真理はそれと違った深い隠れたところに横たわっていると私は考える。

確かに順風の人々には、いまのところ不満をおぼえる事情はない。若い時からの職域がずっと安泰であった人もたくさんいる。しかし一体、その分野だっていつまで存続するものなのだろうか。冷徹にみれば、そこにも不安は渦をまいてはいないか。長いスパンでみるとこの世で永遠に続くものはないのであり、天才は別として誰の業績もいつかは世の中から消えてしまうものだろう。当面恵まれている者もそうでない者もとどのつまりは同じになろう。もちろん、だからといってすべてが空しいといってすませるわけにはいかない。

問題は、遅かれ早かれその消滅していく事象のなかに身をおきながら、しかしなお人生を有意義たらしめ、他からも当然評価されてしかるべきことは何かということになると思われる。

■挫折の一例

挫折が世界的規模で体験されたのは社会主義運動の分野であった。社会主義体制が崩壊してもなお主義にしがみついている人たちはいたのであるが、大勢は信条の変更を迫られたのであり、それ以前にすでに自らイデオロギーを漸次見直していた人々もいた。

私もそのひとりであり、かっての自分の世界が、先がないと念うようになり、自分の過去が崩れていく心持を味わっている。歴史は目指す方向には展開しないだろうし、理想と

された社会は幻想ではないかと考えるようになった時、否応なしにそれまでの生き方に意義があったかを振り返らざるを得ない。その際、まず人生をやり直したらそうならなかったのかと問えば、やはりそうならざるを得なかっただろうと答えるほかないのであった。つぎにその信念にもとづいた行為が社会に有用であったかということについては、掲げた目標とは別の結果になったが、何か役割は演じたのだと意識できた。
「ひとびとが時代の中で何らかの理念や理想を求め、それが観念のうちで肥大化して超越的な観念を措定するような場面が生じるとしても、この〝理想への熱望〟それ自体は全くの虚妄とは言えず、そこにはやはり現実的な根があるのである。」（竹田青嗣、世界という背理）。
　信憑した体系がそのまま通用したということではない。それを確信したために、そこにエネルギーが結集し、道徳的成功をおさめたり民主主義の浸透にも役立ったと思える。社会は反応したのであり、苦も楽もあり燃焼の青春ではあった。

■近代社会の波瀾の続行

　競争世界の会社の場合、社会運動とは事情は少し違っているかも知れない。
　他との相克が直接的で、戦国武将の戦さに似た様相があるのだろうか。勝てば官軍、敗軍の将は兵を語らずなどといわれる。しかしそんな決着で済まされるものだろうか。
　会社が潰れたといっても、まず少なくともかっては、時代の需要に応え、社会貢献を行ってきたという歴然たる事実がある。その後の戦略の誤りから落伍したとしても、怠けていたわけではない。努力しても失敗するということがむしろ世の常であり、その過程に意味が潜んでいるといえないだろうか。
　勝者のみが評価されるとすれば、表層は照射されても深部は闇に消え、真相は分らなくなってしまわないか。
　そして光と影の、影の部分は本当に廃棄されるだけのものなのだろうか。歴史の読物でも敗者の方法と態度に結構感銘をうけるところがありはしないか。
　それに勝者も永遠ではなく、いずれ消えて去っていく。関ヶ原の敗者は明治維新の勝者となった。敗北が下地にあり、そこからいつしか新しい積極的な力が生まれてきていたのであろう。
　ところが現代社会では、目前の勝敗、優劣の結果のみを決定的とみなす考え方が広まっている。過程や内容ではなく均質な連続が、質でなく量が、数字が支配力を揮う。人智が全能の決定力をもつ近代社会の行きついた先である。しかしその将来像は危い。例えばアメリカは、近代の徹底であるが、経済の破局はいずれやってくるのではないか。それにとどまらず、その近代のシステム自体が破綻せざるを得ないことも多くの識者が指摘してきた。最近ではそうした見解が、国際経済の衝に当たっていた元政府高官からも示されるに至っている。「アメリカ社会というのはそういう相対性、関係性というものを理解しない最

も典型的な社会なのですよね。それが今、支配しているのですよ。
　それはどこかで崩れると思うのです。それはある意味では不可避なのでしょうね、中、長期的には。おそらくアメリカというのは近代の鬼子ですが、もう一つの鬼子である社会主義に続いてアメリカが崩壊するというプロセスのなかで、近代が崩壊するということがおそらく起こってくると、私は思うのです。」（榊原英資。中央公論３月号）
　大きな波瀾がさけられそうにない。そうなれば、いま体制を享受している人たちのなかからも、またまた「俺の人生は失敗だった」という人が簇生してくるのではないだろうか。遅かれ早かれ結局は人生を嘆くことになる。

■生き甲斐をどこに見いだすべきか

　このように社会が一貫して進歩するものではなく、かつどの価値観も短命で未来が見通せない場合、どのような人生態度をとるべきか。
　例えばヤスパースは次のように答える。「歴史の歩みの全体は私たちにはけっして知り究めえず、把えられない。歴史は未来に向けての際限のない開放性だからである。私たちは、歴史の知られざる起源と目標の間にたってその未知の暗い谷間でそれなりの立場にたちつつ、よりよい明日に向けて努力し、果てしない充実への探求に生きている。」（渡辺二郎・「歴史の哲学」の要約より借用）
　最終目標が不明で、したがってそれに向って前進し続けることが不可能になったとすれば、とりあえずその都度の生を懸命に生きるほかはないことになる。
　個人は誰しも、かけがえのない一回限りのそのつどの生を、魂をもって生きる。肝心なことはこの自分の魂が感動し納得することだと、人類の知者たちは語ってきた。
　歴史の歩を知り究めえない状況のなかでは、それぞれの時期に、これが最善の方法であったという態度がとれていたならば、固有の人生の意味はあったといえるのである。もとより独りよがりの感動は無意味であるが、どうしてもそうせざるを得なかった現実的な根に基づいた真面目な生き方に、意味がなかったはずはない。

■不遇と苦悩は反転する

　問題は、この自分の必然的な生き方が、ついに社会的評価をうけられなかった辛い事態をいかに考えるべきかということであろう。
　「人間万事塞翁が馬」とか「禍福はあざなえる縄のごとし」という東洋の諺がある。そこにも道理はある。しかし運、不運は表裏して変転するものだなどと安易に達観するだけでは、近代個人の知性の苦悩には応えきれないのではないか。
　この難問には、ヴァルター・ベンヤミンが示唆を与えてくれるように思える。以下にその示すところを私の理解も交えて紹介してみたい。

歴史には、時宜をえないこと、痛ましいこと失敗したことがつきまとっている。この最も深く自然の手に堕ちた姿のなかに、人間存在の本性のみならず、個人の生記述的な歴史性が、意味深く謎の問いとして現れている。

そして、この闇の廃虚のなかから、いつか輝くようになる星たちが出てくる。この星たちは、現実に一敗地にまみれた背景のなかでみえないのであるが、やがて人々の精神のなかに復活し意味がみいだされるようになってくる。一度否定された過去は、変形させられて保存されてきてはいたのであるが、それが別の文脈で新しく息を吹きかえす。つまりいったん排除された否定的部分のなかから、新たな積極的な部分が、つまり先の積極的とされる部分と異なるものが出現してくる。

それゆえ、すべての過去が、人間も事件も、忘れられてはならないのであり、かって起ったことは何ひとつ歴史からみて無意味なものとみなされてはならない。ひとつの仕事のなかにその人間の仕事が、ひとつの人間の仕事のなかに時代が、ひとつの時代のなかに全歴史の過程が保存され、止揚されているのだから。（参考文献「ベンヤミン、歴史哲学テーゼ精読」（今村仁司））

以上のベンヤミンの歴史の弁証法の見地に立つならば、われわれは敗北の過去をたんに廃棄するのではなく、否定はしながらも奥深く抱えて耐えるべきなのである。そのうえで思考を重ねるとき別の相貌が見出され、世界は、均質ではなく矛盾をはらんだ、もっと興趣あるものとして映ることになるのではないだろうか。

すべての歩みは記録され、知らされなくてはならない。真剣な苦汁は吐露されるに値している。ドラマが語られるとき、それは挫折失敗であろうと、合成の織物のなかに位置を占めていたのであり、人々を感じさせ新しいものの土壌となる。

（2001 年 3 月・北鹿新聞）